

メ
ツ
シ
ユ
・
ザ
・
タ
ヌ
キ

バイトを終えてから家に着いてドアを開ける。居間に入った俺は、一瞬にして頭が白くなった。

「……どうしてタヌキがいるんだ？」

六畳の居間に、一匹のタヌキがいた――のだが。

「……どうしてオレンジの毛なんだ？」

そいつは姿はタヌキそのものだが、毛がオレンジ色という、見た事もないヤツだった。

「おう、お帰り」

熱心にテレビに見入っていたタヌキが振り向いた。

「タヌキがしゃべった」

「石岡信くん。いつまで突っ立ってるんだ？ まあ座れよ」

「しかも俺の名前を知ってる」

「とここでこのお茶、シケってるんじゃないか？」

ガラス板のテーブルに置かれた茶碗を器用に右手（足？）で持ち上げる。

「何様だおまえ」

「何様とは失礼な。この状況で驚くのは仕方ないが、もう少し口を慎め」

「タヌキから命令口調」

「そう落ち込むな」

「……疲れてるな俺。きっとバイトのしすぎだ。きっと帰り道の電車だ。早く起きなきゃ。寝過ぎしたら終電なくなっちまうわ」

「水でも飲みな」

ぽんっ。

台所でゴソゴソやっていたタヌキが、コップ片手に俺の足を叩いた。

タヌキを見下ろす。二足歩行で立つタヌキの背丈は、ちょうど俺の腰辺り。

「脊椎の具合は平気か？ おいタヌキ」

「飲めって」

勧められた水を何も考えずに飲んで――吹き出した。

「熱っ！！」

「ぎやはははは！ 湯だよ湯！ 水だと思ったらとんだ勘違い！！」

ざばあ。

「あちあちあちあち！！」

笑い転げるタヌキの上にコップを引っくり返したところ、悲鳴に変わった。

「あちいだら!？」

「ってゆーか、おまえは何だ？」

のた打つタヌキの睨みを俺は余裕で見下ろす。

「見てわかんねえのか？」

本気で言ってるのか、こいつは。

コホン。タヌキは咳払いを一つして、テーブルの脇であぐらを掻いた。無言のまま、テーブルを挟んだ座布団を指す。座れ、という意味らしい。

夢なら早く醒めてほしい。けどタヌキが夢に出て来るなんて、何の暗示だ？

それとも、これは幻覚？ 疲労が限界を超えたか？

などと思いを馳せながら、テーブルを回り込んで座布団に腰を下ろした。

ブウウウウウウウウウウウ…ウウ。

「ぎやははははははははははははははははは！ こいつ放屁しやがったあ！」

爆笑中のタヌキに無言で座布団を投げ付ける。

ぼすっ。ごんっ。

顔面に座布団を食らったタヌキが、勢いで壁に後頭部をぶつけた。

「…まあ、なんだ。俺が何者なのか、まずそれを教えなきゃな」

涙目で頭をさすりつつ言うタヌキ。俺は尻の下の、すっかりペシヤンコになったブーブークッションを投げ捨てた。タヌキは真剣なまなざしで、こう告げた。

「俺は宇宙人なんだ」

ちやぶ台返し。

ごっ。

しかしテーブルは壁に衝突しただけで、タヌキは素早く逃げおおせた。

「地球人は野蠻だな」

ゴロゴロと転がったまま、タヌキが言う。

「タヌキだろ、おまえ」

「宇宙人だって言ってるだろ？」

「全身オレンジ色のタヌキだろ？」

「何を言うか！」

急に声を荒げて、タヌキは拳（前足？）で畳を叩き付けた。わかりづらいが、七、八本の眉毛が吊り上がっている。

「これを見てみる！」

おもむろに立ち上がったタヌキが腹を指す。

3〜4センチの二筋の赤毛。

「何それ」

「見ての通りだ」

もしかして。

「……メツシユ？」

「すぐにわかれ。ったく、地球人は流行が遅れてやがる」

タヌキの分際で舌打ちなんかするし。

「それ、流行ってんの？」

「若者に大人気」

前足の親指を立てるタヌキ（自称宇宙人）。

「ダセエ」

率直な感想を述べていたらタヌキはたいそう立腹したよう。

「わかんねえかなあ。男なら見えない所にこだわるのがオシャレだろ？ ち

よっと高い所に手を伸ばしたり、腕組みを解いた時に見える二筋の赤い毛――

世の女は右から左までメロメロよ。見たところ、地球人にはファッション性が見られないな。侵略・征服の暁にはそこから何とかしないとな」

タヌキはどこまでもマジだ。

「男だったのか」

「女に見えるか？」

「メロメロか」

「腰砕けよ」

「侵略？」

「そう」

「征服って？」

「俺の目的」

………付き合いきれない。

ゴロンと俺は横になり、テレビを見る事にした。

『――本日未明、〇〇市在住の主婦』

ぶつつ。

突然真っ暗になったブラウン管に俺と、リモコンを持ったタヌキが映る。

「やめてくれる？」

「話を聞け」

ぴっ。仕方なく、俺はテレビのスイッチを直接押した。

『田島直人（29）を容疑者として』

ぶつつ。

「……………」

また消され、タヌキを睨む。

「話を聞け」

スイッチを入れる。

ぴっ。

『中央高速道路を走行中』

ぶつつ。

ぴっ。

『トラックが家屋に突入し』

ぶつつ。

ぴっ。

『パレスチナは今、かつてない熱気に包まれ』

ぶつつ。

ぴっ。

『容疑者は未だに意味不明な』

ぶつつ。

ぴっ。

『川の中に捨てられた凶器を探しており』

ぶつつ。

ぴっ。

『どうだい、腹筋が火を噴き始めたろう？』

ぶつつ。

ぴっ。

『判定！ 黒！』

ぶつつ。

ぴっ。

『週3〜4ですね』

ぶつつ。

びっ。

『と供述している』

ぶつつ。

ごすっ。

我慢の限界に達した俺は踵でタヌキを蹴飛ばした。巧みにチャンネル変えたり小技利かせやがって。

「聞いてくれよ話を」

泣いてるし。

一際でかいたため息をつけてから、とりあえず付き合ってやろうと決めた。

寝ようとしても、どうせジヤマするだろうし。こうなったら気が済むまで

話をさせてやろう。

「んじゃあ、まず……そうだな、どの星から来たんだ？」

「俺の星が知りたいか！」

やおら元気になったタヌキ。

「知りたい知りたい」

そしてやる気のない俺。

「地球で言う北極星ってあるだろ？」

「ああ、あるねえ」

「あれのとなり」

「わかるかよ」

「あ、左隣り」

ど「」っ。

「……本当なんだってのに」

頭のとっぺんのコブをさすりつつ、ふてくされるタヌキ。

「じゃあ、地球に来た目的は？」

「侵略と征服」

「こんなところで茶あ飲んでえ？」

「下見だよ、下見」

口の左端を吊り上げ、不敵なつもりらしい。

「どうして征服なんかすんの？」

「愚問だな」

「寝るわ」

「まあ聞けって」

そそくさと立ち上がろうとした俺の肩に獣の手が乗っかる。

「地球はな、ずいぶん昔から俺らに監視されてんのよ。その間に見るに堪えないほど廃れて来たし、ここらでは唯一住みやすい星が危険に瀕している――ここで俺の登場だ！ 星を汚す生物を絶やし！ 元来の住みやすい環境に戻す！ そして酒池肉林！！」

「飛躍したな」

「ビバ☆ハーレム！！」

ぴろりりんっ♪

「敵襲！？」

「メールだって」

突然慌て出したタヌキを一殴りしてから、ジーンズのポケットからケータイを出す。

「女か」

液晶に映ったメール画面を脇から覗き込むタヌキ。

「バイトの友達」

「女の名前だな」

「ジャマ」

首根っこ捕まえてタヌキを放ってから、俺は短いメールを読んだ。

『おたがいにバイトおつかれっ。今度あそぼ（はあと）』

相手は1コ下で、気が合う女。ただいまフリー。

――惚れてる。

思わず握り拳。

「――告れ」

「わあ！」

額にでかいコブをこさえたタヌキがいきなり顔を寄せた。

「チャンスだぞ、信！ 他のヤツに盗られる前に奪え、信！ 幸せな恋人生活だ、信！」

「気安く名前を連呼すんな！」

めりっ。

顔面に蹴りを入れる。

「……気安く蹴るな」

「てか来んなよ！」

……あれ？

金色の光が消え、目を開くと——俺の指は何もない壁を指していた。部屋には俺だけ。他には誰もいない。テレビから出るバラエティ番組の笑い声が響いて消える。寒い——窓が開いているのに気付いて、閉めた。

何もなかった…のか？

ふと。畳に落ちていた赤い毛を一本、見つけた。テーブルの上にあった茶碗からは、まだ湯気が上っていた。

あれから三ヶ月。タヌキの姿は見えていない。もしかしたらただの夢だったのかもしれない。

どっちにせよ、いなくなってもらって助かった。うるせーんだよ、あいつ。ま、体験が体験だけに、一切他言していない。

てか、できねーだろ。

赤のメッシュ入れたオレンジのタヌキ（自称宇宙人）のおかげで告白できたんだ——なんて、彼女に言えやしないんだから。

「メッシュ・ザ・タヌキ」

Written by nakoso

© nakoso 2008

Release Date 2008/12/17 on Bottle Novel

<http://bottlenovel.blog.shinobi.jp/>

Twitter (as inabetz) :

<http://twitter.com/inabetz>

Mail :

nakosokan@gmail.com



「メッシュ・ザ・タヌキ」 by nakoso is licensed

under a Creative Commons 表示-非営利 2.1 日本 License.

Based on a work at <http://bottlenovel.blog.shinobi.jp/>